

県産堆肥でつくろう がんじゅーおきなわ

たいひ

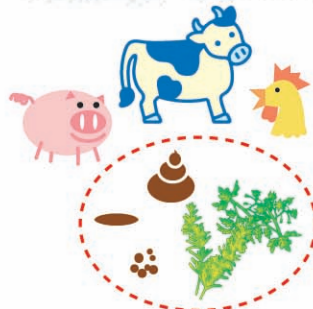
堆肥って何だろう？

堆肥は、家畜ふん、野菜くず、落ち葉などの再生可能な資源（バイオマス）を原料として用い、酸素が十分にある条件で堆積し、微生物の働きによって分解してできた肥料のことです。つまり堆肥は、廃棄物が微生物の働きによって生まれ変わった資源です。

堆肥をつくる微生物は、酸素を消費しながら家畜ふんなどの原料を分解していきます。そのため、微生物に酸素を供給するために、堆積した原料を時々機械で切り返しながら手間ひまかけて作ります。

なぜ、作物栽培には「堆肥」が必要なの？

このようにして作られた「堆肥」を土へ施すことは、作物を栽培する



家畜ふん、野菜くずなど（バイオマス）を原料とします。



微生物が分解しにくい有機物、灰分および適度な水分が残った物が堆肥です。



堆肥製造

上で大変重要な意義を持ちます。作物は、土の中にある養分を水とともに根から吸収します。一般的に堆肥には、作物の生育に必要な養分を供給（肥料的効果）するほか、土の中に適度な水や酸素を蓄えたりすることで、作物の根が酸素不足や水不足にならないようにする土の構造（土壌の団粒化）を改善する力を持っています。つまり、堆肥を施すと土は柔らかくなり、作物の根が伸びやすく、生育しやすい良好な環境を作ることができます。

県産堆肥でつくる、
環境にやさしい農業

しかし、堆肥は原料の種類や割合などにより、農地へ施したときの効果に違いがみられます。そのため、堆肥を施す場合は、利用目的に即した堆肥の選定や施す量を確認して利用する必要があります。

また、堆肥は作物の種類によっても必要量が異なる上に、堆肥を施す土にも堆肥の受入可能な量があります。これは、私達人間と同様、作物栽培でもメタボリックシンドロームの様な状態になりえます。必要な量を、必要な時に、必要なだけ摂取する（堆肥を施す）ことが大切です。私達の地域環境を保全するためにも県内で生産された堆肥を地域内の農地で利用することは、生活環境を守ることに繋がります。

この機会にぜひ、沖縄生まれの堆肥を家庭菜園や農業など、作物栽培で広く利用していただき、県産堆肥の利用でつくる健康な土、健康な作物、そして健全な地域環境の構築「がんじゅーおきなわ」に向けて取り組んでいきましょう。

お問い合わせ【県畜産課】TEL：098-866-2269 FAX：098-866-8411



タバココナジラミ(媒介虫)

トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻病は、トマト黄化葉巻ウイルスが原因の、トマトやミニトマトに感染するウイルス病です。この病気にかかったトマトは、新しい葉が黄色くなったり、縮れたり、生長がとまったりするので、実がつかなくなります。苗のときに感染すると、収穫が全くできなくなるおそれがあります。

この病気は、タバココナジラミという1mm程度の小さな白い虫によって伝播します。病気にかかったトマトを食べても人体に影響はありません。

国内や県内での発生経緯

トマト黄化葉巻病は、平成八年（一九九六年）に長崎県、愛知県、静岡県で初めて発見され、平成十九年十二月現在では、西日本を中心に三十二都府県で確認されています。沖縄県では平成十九年一月に初めて確認され、平成二十年四月現在で十九市町村で発生しています。

トマト黄化葉巻病の防除方法

トマト黄化葉巻病は一度感染すると治りません。また、病気にかかった株をそのままにしておくと、タバココナジラミがこの病気をどん

どん拡げます。

この病気のまん延を防ぐためには、発病株を抜き取りビニール袋などに密封して処分することが重要になります。

また、家庭菜園や露地のトマトが病気の感染源（温存源）となりやすいので、生産農家に限らず、家庭菜園においても、これらの病害虫の防除を十分に行う必要があります。

施設トマト産地では、露地や家庭菜園でのトマト栽培をする際にトマト黄化葉巻病に注意し、安定した生産が確保されるように地域全体で防除に取り組んでいきましょう。



トマト黄化葉巻病に感染した株



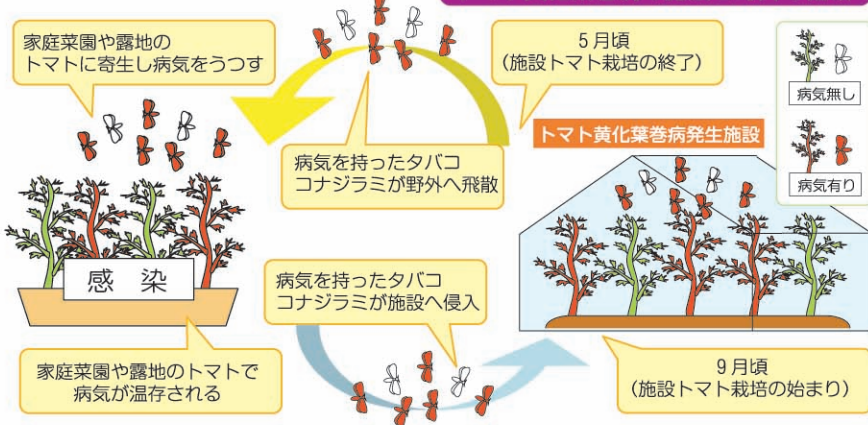
感染株の抜き取り密封処分

トマト黄化葉巻病の発生地域

平成20年4月現在



トマト黄化葉巻病の施設と野外の循環



お問い合わせ【県病害虫防除技術センター】TEL：098-886-3880 FAX：098-884-9119

